

手術で開腹せず！
すい臓も開腹せず！

千葉県がんセンター消化器外科

医師
趙明浩 医師

は一層難しいものとなります。

さらにすい臓がんは、特別に浸潤(周囲に広がっていくこと)傾向の強いがん。腹腔鏡での切除は難しいと言われ、すい臓の腹腔鏡下手術はこれまでほとんど行われてきませんでした。

しかし、ここ数年来、腹腔鏡の手術器具が著しく進歩。手術者の技量も向上するにつれ、日本国内の一部の先進的な施設で、すい臓の腹腔鏡下手術が行われ始めています。

すい臓の腹腔鏡下手術

知られた腹腔鏡下手術。その歴史は、約20年前(1990年代)に胆のう摘出手術に始まり、以来、急速に普及。現在、胆のう摘出、膵臓、大腸などの手術などでは、ごく一般的に行われるようになりました。

腹腔鏡下手術ならではのメリットは？

すい臓の腫瘍は、最近では20代の若い女性にも見つかるようになってきています。腹腔鏡の傷は、従来の手術とは比較にならないほどの小ささ。傷が小さいということは、若い女性に限らず高齢の方にも大変喜ばれます。傷が小さいので痛みが少なく、痛み止めの使用量も少なくて済みます。

また、開腹手術より体力を奪われない点もメリットの一つ。おなかを大きく切り開くとそこからたくさん水蒸気が逃げてしまい、体の循環動態を悪くしてしまうのですが、腹腔鏡下手術ならその心配

「腹腔」とはおなかの中のこと。腹腔鏡の「鏡」とはカメラを意味します。おなかを開けた数ヶ所の小さな穴から腹腔鏡と呼ばれるカメラや手術器具を挿入し、テレビモニターを見ながら手術する「腹腔鏡下手術」。中でも今回は、今はまだ限られた施設で行われていない『すい臓の腹腔鏡下手術』について、千葉県がんセンターの趙医師にお話をうかがいました。

なぜ、すい臓の腹腔鏡下手術は

行われなかったか？

近年、王監督が受けた手術として広く

すい臓は、胃や十二指腸などの大事な臓器や主要な血管に取り囲まれていて、万が一、周囲の臓器や血管を損傷してしまうと大変なことに。また、すい臓疾患の場合、時にすい臓を併発し炎症が周囲にまで及んでいることも。そうなる手術

もありません。体力のない高齢の方にもお勧めできません。

さらに、腸閉塞が少ない点も大きなメリット。腸閉塞は傷にくっついて起こる合併症ですが、腹腔鏡下手術の場合は傷が小さいので腸閉塞が起こりにくいのです。

難易度という点では、開腹手術よりリスクが高くなりますが、リスクが高いと判断した段階ですぐ開腹に切り替えますので、当センターでは、すい臓の手術を腹腔鏡下で行ったがために大変なことになったというケースは過去ありません。

腹腔鏡下手術の驚くべき進化系とは!?

これまで、すい臓の腹腔鏡下手術は世界的にもなされていなかったのですが、これからは間違いなく広がっていきます。その際に不可欠となるのが、手術者の技量の高さ。そこで今、千葉県のメンバーが中心となつてすい臓の腹腔鏡手術の研究会を開催。全国から熱心な医師たちが集まりトレーニングを積み重ねています。

そして近い将来には、この手術をロボットが行う時代がくるでしょう。日本にはまだ5台しかありませんが、アメリカでは前立腺がんの手術の際『ダヴィンチ』という



千葉県がんセンターでは、2007年から先駆的にすい臓の腹腔鏡下手術を開始。中でも特に難しいとされる腹腔鏡下でのすい頭十二指腸切除の件数は群を抜いて日本一。



すい頭十二指腸切除術(左)と、すい体尾部切除術後(右)。傷跡はほとんど目立たない。



5～10mmの小さな孔から手術器具を挿入

名の手術ロボットが盛んに使われています。前立腺がんは骨盤の奥深くにあるため、眼で見て取るのが難しい。それがロボットなら、人のおなかに小さな穴をあけ、そこから手をつっ込んで奥まで見ながら手術できます。

SFのような世界ですが、アメリカでは、前立腺の手術はおなかをあけて人間がするよりロボットが行う方が安全とされ、前立腺がんの手術の約70パーセントはロボットが行っています(ロボットは医師が操作します)。

開腹手術が完全に無くなることは無いものの、開腹から腹腔鏡下手術へ。さらには手術ロボットの時代へ。その進化は遠い未来のことではなく、もう目の前の話なのです。

腹腔鏡下手術の主なメリット

- かわめて傷が小さい
- 傷が小さいので痛みが軽く、出血量も少ない
- 痛みなどが軽いぶん手術後の回復が早い
- 腸閉塞が起こりにくい